
トラブルDAYS！

ぴよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラブルDAYS！

【著者名】

ぴよこ

【あらすじ】

「おかえり、花音ちゃん」「…どちら様？」

ある日、仕事から帰つた私を待つていたのは、ほかほかの温かいごはんと、沸かされたばかりのお風呂。それから、日本人離れの容姿をした綺麗な男でした。

だからあなたは誰なのおおおお！？！？！？

変態クオーター男に惚れ込まれちゃつた、美人のさんのトラブルな日々。ここに開幕！

First Contact（前書き）

ヘンタイが脳内で暴れ回るので、とりあえず少しだけアップします。

First Contact

「…どういたしま？」

見慣れた1LDKの部屋。

ピンクのカーペットに白い家具。ストライプと花柄のカーテン。

…間違いない私の部屋だ。

「おかげり、花音ちゃん」

先日近所の雑貨屋で見つけたブタちゃんのミトンで鍋を持つ男。

わいわいの明るい髪の毛に、日本人離れした端麗な容姿。

くつきりした堀の深い瞳と高い鼻。

女の子の中でも背の高い私が、見上げるほどとの長身。

「…ハーフ？」

「残念。クオーターです」

ああ、クオーターか。なるほど…

「花音ちゃんさ、『はなこ』するへお風呂にするへ…それとも僕にする？」

「はあ！？」

「初日でちょっと恥ずかしいけど、花音ちゃんが望むなら『けやだよーー！』

色白の頬を染めて恥じらう男。

いや、だからあなたはどちら様ですかあああああ――――――――――

トラブルな日々、開幕！

いや待つて。

落ち着くのよ花音…つ…！

「」は私の部屋。

わつきも確認したし、それは間違いない。

今日は6時半に起きて、お母さんから届いた手作りベーグルを食べて、髪の毛巻いてメイクして。きちんと鍵をかけてから家を出たはず。

出社して、いつも通りに業務をこなして…お昼はおこしいパスタランチを食べて。

ちゅこつと残業して、7時に会社を出た。

あつてる…？あつてるよね！？

いつもと同じ変わらない普通の一日だったよね！？

そこから電車に乗つて我が家である「」のマンションの最寄り駅に着いて。

えーと、駅前のイルミネーションがあまりにもキレイだったから少し寄り道して…。

明日からのクリスマスを挟んだまたかの素敵な三連休を幸せに過ごすであろうカップルたちに囲まれて、彼氏のいない私は「みんな出掛けた先で喧嘩したらいい！」とか最低な事を心の中でこつそり思つて。

コンビニに寄つて焼酎一本とつまみを買って、そんで帰つてきたら知らない男が鍋作つてお出迎え！？

はつーー

あれなのーー?

あれが悪かったのーー?

幸せに水を注すことと思つたからバチが当たつたのーー?

24歳独り身女のちよつとした嫉妬の裏返しなのーー?

いいじやないーー

ついせめしこんだもんつーー

「おーい花音ちゃん」

「.....」

「H e y , B a b y ?」

「ベイビーじゃなこわよつーーー『色黒』こと『黒』わなこいでーーー」

「せつがくのお風呂も僕も冷めちゃうよーまあどうせまた温めればいい話だけど。やつこえは花音ちゃんの『お風呂』は追い炊き機能がついてるんだね。便利だなあ」

当たり前じやないのーー

毎日の半身浴のために追い炊きのつこてる物件わざわざ探しめたゆーかそろそろもつ回聞いてもここみねーー

ーー

「あなた、誰？」

「ゆつくり、はつきりと、だけどできるだけで声を張つて、私は言つた。

「ちひの変態は、たまにつつとつしい英語を使つてくれるけど、日本語はペラペラみたいだし、その辺は安心だ。
ただでさえ『ミコニケーション能力低そつなに』、言葉も通じなかつたらたまたもんじやない。」

名前も知らない顔のだいぶキレイな変態は、ものつすじょく心臓に悪い、煌びやかな笑みを浮かべると、持つていた鍋をコタツのしてあるテーブルに置いた。

私のお気に入りであるブタちゃんのブランチを外して現れたのは、これまた石像のようなキレイな手。

真っ白で、とても大きくて。陶器のようなツヤツヤの肌、爪の形まで完璧だ。

本当に何者なの?」この男は。

「はじめまして、花音ちゃん。僕の名前はRui=Dailey
=Caroleといつます。よろしくね」

「…私にも分かるような発音で、もう一度お願いできる?」

握手を求めたのであるつそのキレイな手を、私は握らない。

だってなんて言ったか全くわからなかつた。自慢じゃないけど、高校の時のリスニングの授業はほほ意味が理解できなくて、毎回赤点祭りだつた。成績はもちろんひよこさんだ。（2つてことね。5段

階でだよ！

「Of course! ルイ＝ディズリー＝キャロルです。fir
st nameはRui。だからルイって呼んでね、花音ちゃん」

「ルイ：さん」

日本語英語というのだろうか。わかりやすく言い直された名前をやつと理解し、私がその手を握ると、そのルイとかいう名前らしい変態は、ことあるうち私の手を顔の高さまで持ち上げて、そのまま甲に小さくキスをした。

「アヒル」――――――――――――――――

私の断末魔が部屋中に響き渡る。でも変態はこちらの反応など全然気がしてない。

いや、気にできないから変態なのか。 そうしている間にも、何度も何度もキスを繰り返す。

力が強いのか掴み方がうまいのか、全くほどけない。

「...ナドアセサ...」

「どうして？挨拶なのに」

心底不思議そうにする変態めがけて怒鳴り声という砲弾を発射する。

「こゝ日本だから！－てゆーか、いくら挨拶でもそんなに何回もし
なくていいでしょ！－分かつたら今すぐその顔をびけて手を離せつ

! ! !

「じゃあ、ここがもしイギリスならこのままキスしてもいいの？」

「屁理屈言つなかああ――――――――――」

「
： 残念」

それは起きた。その言ひてやつと歯を私の手から離した変態に安心しきる時、そ

ペ
ろ
り。

手に生温かし感触

あまりの想定外のこと、一瞬落ち着いてその様子を見守っていた

なつなつなつ、 、 、 舐めたああー！？！？！？

舐めたよね！？今完全に舐めたよね！？

いやありえない……………

驚愕している私を熱っぽく見つめた変態はやつと私の手を離すと、そのままにっこり微笑んでから言った。

「今日からお世話になります。花音ちゃん。」

ドッカーンと大噴火した私を見て、変態は声を上げて笑っていた。

今日からお世話つてどうゆうこと！？

つーかまだ名前しかわかつてないんですけどー？

血圧上がりすぎてくらしきやう。

まだ仕事から帰ったままの私はコートも脱いでいない。

どこの誰なのかを聞くだけで、なんでこんなに体力を消費しなきゃならないんだろ？

ああダメだ。このまま変態のペースに乗せられたら、とんでもないことになるつ！

そう思った私はとつあえずコートを脱いで、クローゼットにかけるべく移動を始める。

「花音ちゃん、とつあえず！」はんにしちやうね？」

なにがそんなに嬉しいんだかわからぬけど、二三二三ながらキツチンに戻る変態は無視だ！無視！それに限る！

コートをハンガーにかけて寝室にあるクローゼットへしまー、部屋着に着替える。もこもこした素材のそれは、ミント色でドット柄。で、なんと780円ー！この手のものは、ひと冬使えるかどうかってくらいに割りとすぐボロボロになっちゃうから、安くていーの。でもすごいかわいい！

昨日卸したばかりのお気に入りのその部屋着は、780円だけど私のテンションを一気に押し上げてくれた。かわいいのに温かい。いい仕事するぜ。かわいけりやいってもんじゃないのよ部屋着はつ。機能性も大事！

そのまま洗面所に向かう。

念入りに手を洗つて、うがいをしてから、母から送られてきたアルコールの消毒剤をワンプッシュした。

そして手にすり込む。これでもかという程に。

そして巻き下ろされている髪の毛を耳よりも低い位置でふたつ結びにする。

24にもなつてふたつ結びはだいぶ痛いんじやないか。今日も鏡に映る自分に問いかける。

だけど習慣つて恐ろしいもんで、アップにしたり、お団子にしたりすると、家にいるのにどーにもリラックスできない。
だからやつぱり今日も辞められない。別にこの髪型で外に出るわけじゃないし普段はいいんだけど、今日はあの変態がいるし、ちょっとだけ悩んだ。まあでもいいか。変態だし。あっちの方がよっぽど恥ずかしいわ。へつ。

これでよし。ちょっと気持ちも落ち着いた。

変態は、初対面の時から私の名前を知っていた。

それどころか、施錠のしてある家に勝手に上がり込んで他人（私のもの）を使っている。

これって、私が認知しなければ立派な犯罪じやないの？

どう考へてもおかしいでしょう。

あんな派手でインパクトのある容姿、一度見たら忘れる」とはないだろう。あの変態とは今日が初対面。それは自信を持つて言える。ポケットから携帯電話を取り出して、110番を押す。あとは発信ボタンを押せばすぐに繋がるしてから、一つ折りにたたんで、ポケットに戻す。

犯罪者の可能性も十分ある。

それを頭に叩き込んでから、大きくて息を吐いて気合いを入れた。

リビングに戻ると、テーブルの上には一瞬みただけでよだれが出そうになるほど、見事麗しい料理が並んでいた。

お鍋はまだ蓋が閉じられたままなので何の鍋なのかはわからない。ただ、とてもいい匂いがする。

その他にも、パリパリのあぶら揚げの上に大根おろしと薬味がたっぷりかかったもの。

サーモンとアボガドとチーズの生春巻き。

黄金色の厚焼き卵。

酒飲みには嬉しい、たこわや。

そしてふっくらした白いご飯。（いつも私が炊いてるのより明らかにおいしそうに見えるのはなぜ）

文字通り、その料理たちは所狭しと並んでいて、気持ちの問題かもしれないけどその周辺が輝いて見える。

え。あのせ、お鍋の日つて普通は鍋だけじゃないの？

ここぞとばかりに手抜きしない？

こんなに副菜作ったことない！

てゆーか1人暮らし始めてからは鍋だつて作ったことないけど！

なんだろ居酒屋みたいなラインナップ。すつごい好みなんんですけど

～つ～！

並べられた料理を見て眼差しを思わず輝かせると、変態はとつても嬉しそうに笑つた。

だけどお鍋の蓋を開けながら言ったその一言で、私は我に返る。

「張り切ってたくさん作ったから、こつぱに食べてね。お鍋はい」も豆乳鍋だよ～。花音ちゃん、好きでしょ～？」

思わずひきつる笑顔を隠せない。

なんであんたがそんなことじこ存知なんですかー？
ダメダメーーーこのまま餌付けされたらダメよ～花音ーー
おいしそうだけど…！
わざわざ買ってきた焼酎片手に乾杯したいけど…！

この変態の正体をはつきりさせなくちゃ…！

ポケットの携帯電話を再度握りしめて、オコタに座つていそいそお鍋をとりわける変態を見つめながら私は口を開いた。

「…どうやつてひつひつに入ったの？」

「 もうひるご、玄関の鍵を開けて、だよ？」

どうしてそんな当たり前のこと聞くか分かりません、みたいな当然な顔をして変態は答える。

「の…！」

「初対面のあんたがビービーの家の鍵を持つてるのよー答えの内容によつては警察に突き出すわよー!？」

「それは困るなあ～。花音ちゃん、本当に何も聞いてないの？」

「何も聞いてないからあんたが何者なのか知らないのよー…わざわざから言つてるでしょー…！」

「僕、お母さんに花瓶ひやのねうが」泣き声で言つた。許可頂いてるんだけど。鍵もお母さんからお借つしたんだよ」

「ええ！？？！？」

あまりに驚いて、手から力が抜けた。携帯が間抜けな音をだしてしてして床に転がる。

お母さん... お母さんだつて!?

「...ルーラー...」

「話せば長くなるんだけど…。うちの母と花音ちゃんのお母さんは古くからの友人でね。僕はイギリス国籍をとつてずっとあちらにいたんだけど、ワケあって日本で仕事を始めたことになつたんだ。慌ただしく身ひとつでこちに来てしまつたものだからまだ不動産屋も回れてなくてね。」

「とりあえず、座つたら？」と、我が家のはずなのにはすでに妙に馴染んでいる変態に席をすすめられる。話は長くなりそうだし、正直びっくりすぎて足に力が入らない。座つたそうがよさそう、と判断した私はまだ警戒を完全に解かないまま、床に落ちていた携帯を拾つてから席に着いた。

「それで、母が花音ちゃんのお母さん口を聞いてくれたんだ。僕としてはホテル暮らしで充分だつたんだけど、母と挨拶に行つたら「うちの娘のとこ泊まつたらいいじゃなうい！」なんてすすめられてね。恋人もいないようだしどうせ年末年始飲んだくれて過ごすだらうから、食事の世話だけしてやつてつて、この家の鍵を頂いたん

だけど……」

「聞いていなかつたみたいだね」と、苦笑する変態を見て私はすぐさま携帯で母のメモリを呼び出した。

有り得る。うちの母なら言いかなない……変態の母のロマネはとてもよく似ていて、説得力が満載だった。

そうなつたらもう直接本人に問い合わせるしかない！！のに！！「電波が届かないところにいるか、電源が入っていないためかかりません」「あー！？ふざけるなああああ…………！」

実家の家電、父の携帯、と鬼のような形相（多分）で電話をかけまくる私に、変態はにつこう笑つて最後通行を言い渡す。

「お母さんとお父さん、今日からグアムに行くなつてしまつたよ。もう出発したんじゃない？」

バツと思い切り振り返つてカレンダーを見やれば、12月23日から1月7日まで、長い長い赤い線が伸びていて、「父、母グアム旅行。ちくしょー！」と書いてあつた。あれは間違いなく私が書いたものだ。

父と母はたまりにたまつた有給を、まさかのお正月休みに連結させて、今日から長い連休に入り、ふたりでグアムに行く、と先週電話した時に言つていた。仕事からの帰り道、毎日の習慣となつている母との電話の中でそう言われて、あまりのうらやましさにのた打ち回つたことは記憶に新しい。

そうだ……今日の夜の飛行機でもう向かつてはばだ……！
どうりで今日はいつもの時間の電話に出なかつたはずだ。行く前に連絡くらいくれてもいいじゃない……！

「若い娘の家の鍵勝手に渡すなんて…！－あんの母親！」

うちの母はとにかく顔が広い。どいでどう知り合ったんだか聞きたくもないような方々がしそつちゅう実家に訪れて、その度にそういう人たちを家に泊めていた。

飲み屋で相席したおじさんを泊めた時はさすがに父に怒られていたけど、母はそういう人なのだ。よく言えば懐が深い。悪く言えばただの考えなし。人を見る目は確かだと思うけど、今まで運がよかつただけのように感じる。いつ犯罪に巻き込まれてもおかしくないと、何年か前に父に諭されてからは、そういうことはだいぶ減つたと聞いていた。

なのに！久しづりのおせつかい、まさか私のマンションまで宿代わりにするとはっ！やりかねない！！むしろ一人暮らしはじめてこの何年かこうこうしが一度もなかつたことが不思議かもしれない！

諦めにも似たため息をひとつついて呆然とする私を申し訳なさそうに見つめた変態は、取り分けてくれたお皿をこちらに差し出して、慰めるような口調で話し始める。

「僕も年明けには本社に出勤しての仕事が始まるし、それまでには家を見つけて出て行くから。長くては一週間ほど、お世話になります。花音ちゃん」

湯気のたつたそれを受け取り、中身を見ればにんじんがお花の形をしていた。わざわざ型抜きしたのだろうか。かわいいそれに思わず笑みがこぼれる。

きっとこの変態も、多分お母さんの押せ押せに圧倒されて断れなかつたんだろう。母が旅行から帰つたら金輪際このようなことをしな

「さつといひの母が強引にことを進めたんですね。犯罪者扱いしてすみませんでした。あの、お母様にもよろしくお伝えください。」

「口の皿をテーブルに置いて、崩した足を正してから、真っ直ぐと変態に向か合ひへ。

「さつといひの母が強引にことを進めたんですね。犯罪者扱いしてすみませんでした。あの、お母様にもよろしくお伝えください。」

ペコリと頭を下げれば、慌てた変態思い切りかぶりを振った。

「せんなつ！ 頭を上げて、花音ちゃん。僕たち親子は久しぶりの日本で身よりもないから、とても感謝しているんだ。だから…」

「お母様もいじらひこ？」

疑問をすぐに聞いたせば、歯切れ悪く、口を濁す。

「あ、うん…。僕は、ちょっとそこへは行けないんだけど、母も一応は不自由なく生活しているだろ？ から。あの…」

途端にじどりもどりになつた口調が怪しい。ま、ワケあつてことね。出来れば関わりたくない。私は母とは違つ、面倒」とほんのめんだ。

「ならルイ…さんも、どこかホテルに移動されたらいかがですか？ 事情はだいたい把握しましたけど、うちの母の言いなりにならなくともいいんですよ？ その方が過ごしやすいでしょ？」

お互に、ね。と心の中で付け足す。そして出来ることならこのまま出て行ってくれと言わんばかりの失礼な言い方を承知で詰め寄れば、変態はあつさりその提案をぶつ潰した。

「いや、出来れば玲子さんの『』好意は無駄にしたくないんだ。僕ら親子の恩人だから。花音ちゃんは、やっぱり迷惑…だよね？」

やめろおおおおおお…！…！…！

そんな捨てられたら子犬のような目で見つめるなあああ…！

鍋からたつ湯気がまたナイスな演出を醸し出して、スモークのたかれた中に置き去りにされた子犬が一匹、そこにいるみたいだった。

悶絶する私に続けて口を開く。あ。ちなみに玲子とはひつちの母のことです。

「もしかして、恋人がいる？」

「いや、それはいなきけど」

否定してから気づいた。恋人に悪いから、とか言えばホテルなりなんなり新しい宿探してくれたんじゃないのかー？この料理の材料だつて、もちろん型抜きだつてうちにはないんだから買つたんだろうし、お金は持つてるでしょうに…！

「わう。よかつたあ」

とつでも嬉しそうに笑う顔を見て、私はほつとした。あの捨て犬のよくな顔は本当にやめて頂きたい。

「あの…でも、母も言つてたと思つんですけど、僕本当に料理とか全然しないんです。掃除だけは部屋が汚れるのが嫌だから一応しますけど。だからなんのおもてなしもできないだろうし、年末は仕事

が忙しくなるんで精神崩壊一歩手間、みたいな感じになるから嫌な
思いさせるかも…」

もうこれ以上理由がないぞ！！他に泊まると頷いてくれ……頼む
！頼む！！

「そんなの全然構わないよ。泊めてもらう以上家事は僕がやる。僕
の仕事はパソコンさえあればどこででもできるから、ね。料理は小
さい頃からやつていたから得意だし、花音ちゃんの好きな食べ物は
玲子さんからちゃんと聞いてきたよ。」

「確かに料理は得意みたいですね…。」

目の前に並ぶ料理たちを見て、生睡を飲む。

超食べたい、ちょーつつ食べたいっ！誰かの手作りってだけで既に
嬉しいのに、自分の好みが全面に押し出されたメニューの数々！こ
の人がいれば、毎日こんな素敵なものが食せるのか…。

「それと、仕事が忙しい時期に余裕がなくなるのはみんな同じだよ。
僕はいろんな花音ちゃんが見たいんだ。だから余裕のない花音ちゃ
んだって、見れたら嬉しい」

ゾゾゾゾゾッ！！！！！

ちょっと…！体中に鳥肌がたつたじゃないの…なんつでいちいちそ
んな感じなの…？あれなの…？口の中に女を喜ばせる台詞装置とか
しこんでんの…？残念ながら嬉しいどころか気色悪くてたまらない
んですけどっ！

私はテーブルに肘をつき、手のひらで額から頭を支える。

なんかもう…逃げ道が全くない…。もうこうなつたら仕方がないの

?母のしたことだ。娘の私にだつて責任はある。

実は食べ物につられた、とかではない。断じてない。ないつたらな
いッ！――――

「あの」

「なにかな?」

「フォンダンショコラ、作れますか? 中からチョコレートがトロ～
つてでてくる……」

「もちろん作れるよ! お菓子作りもたくさん練習したから、まかせ
て!」

「練習?」

「あ、いや、小さい頃にね!」

綺麗な瞳に口唇が揺れる。

この人隠し事とかできないな。すぐバレそう。
じいっと見つめていると、居心地が悪いのか恥ずかしいのか、顔を
赤くして下を向いてしまった。なんかモジモジしてる。モジモジく
んかつ!

「…わかりました。一週間、ですね?」

「花音ちゃん!――」

ああ、お尻からパタパタ尻尾が見えるわ。やめてちょーだい。
犬好きな私は判断を誤りそうになる。これは犬ではない。れつ

きとした人間なんだから。抱きつきやうな勢いで手を伸ばしてきました変態を私は手の平を前に突き出すことで制した。

「ちょっとでも変なことしたら叩き出しますよ。むやみやたらに触らないでください。私は日本人ですので」

調子のんなよ、と目で伝える。見た目はいいけど、初対面で手を舐める変態なのだ。甘い顔したら何されるかわからぬ。

「わかった。花音ちゃんの嫌がることは絶対にしない。誓つむ」

「I promise」右手で拳握つて左胸を叩く。そんな姿もやけに様になる。本当にクオーターなんだろうか。イギリス国籍つてことはおじいちゃんかおばあちゃんがイギリス人なんだろうけど。あまりに整っているその容姿の四分の三が日本の血筋だつて言われてもどうにもピンと来ない。

「では改めて。桜木花音です。一週間よろしくお願ひします、ルイスさん。」

「ううううう。敬語は使わなくていいよ。最初みたいに元気な花音ちゃんがかわいくて好きだなあ。あと、さん付けもいらないよ。ルイつて呼んでくれたら嬉しい」

「…じゃあ、おいおいで」

「かわいい」とか「好き」とかポンポン言つ男は心の底から信用できない。ばーい花音調べ。さつきから甘い言葉の連續だし、女好きなのか天然でタラシなのか。それともイギリスの方つてみんなこん

な感じなの！？

まあもうこひらの嫌がることはないと言っているし、とりあえず心の中で変態と呼ぶのはやめよつ、一週間でも同居人だもの。できれば仲良く過ごしたいじゃない。

こうして私とルイの、期間限定同居生活が始まった。

同時に、平穏だった私の人生がトラブルの絶えないものへと変わっていく幕開けとなつたのだった。

「おはよう花音ちゃん」

「…おはよう、じゃいます」

目が覚めたら夢だった、とかいうオチを期待していたのに、やつぱりそれは無理だよね。

キラツキラの笑顔が眩しい。本当にきれいな顔。日本とイギリスの血が絶妙なバランスを織りなして作りあがつたんであらうその姿は、この人モデルですよ、と言わても、まあそうでしょうね、と頷いてしまうほどに洗練されていた。まだパジャマであるスエット姿なのに。なんか高級に見える。悔しい。あれきっとゴー 口でしょ？ 後で確かめよつ。

今日は12月23日。三連休の初日だし、惰眠をむさぼる予定だったのに、変態同居…違つ。ルイ、さんのことが気になつてやたら早く目が覚めてしまった。

にも関わらず、リビングは焼きたてのパンの香りで満ちている。

「いいにおいですね」

「パンを焼いたんだ。ラズベリーとくるみのパンだよ」

「わあ！大好きです！」

「えつ…？もう僕のこと好きになつてくれたの！？触つていい！？」

「違います。パンの方です」

ふざけんな変態が。

手をワキワキするのはヤメロ。

即座に否定すると、しょんぼりしながら、キッチンに戻つていく後ろ姿がなんだかかわいい。

言つてることは全然かわいくないけど。どんだけ触りたがり屋なんだ。

おっといけない。変態呼ばわりはやめなきゃね。

昨日はあれから、ルイさんの作ってくれたおいしいごはんをたらふく食べて、コンビニで買つてきた焼酎を烏龍茶で割つてガブガブ飲んだ。

大抵の男の子にはビカれてしまつ酒豪つぱりを自覚している私は、うわばみ 蟒蛇のように酒を飲む私を見てもにこにこ嬉しそうにしてるルイさんに少し驚いて、この人も酒飲みなのかも、と嬉しくなつて同じようにお酒を勧めてみた。

だけど「飲むと人格が変わるらしいから、どうしようかな…」と聞いた瞬間に、渡したグラスを引つたくつて自ら一気飲みさせて頂いた。

酔つ払つた変態。ブルブル。こわい、こわすぎる。

それからひたすら食べることに徹した私は、満腹になつてすぐものすごい眠気に襲われて、片付けも手伝わないままコタツで寝入つてしまつた。

うん。わかってる。食うだけ食つて片付けもしないまま寝ちゃうとかありえないよね、あと変態になにされても仕方ない状況だつたよね。『めんなさい、私が悪かったです。

だけど「花音ちゃん、風邪ひいちゃうよ」と優しい声で起こされた時には、もうすでにテーブルもキッチンも綺麗に片付いていて、も

ちろん私も寝たままの体制だった。やつと何もなかつたと信じてる。

「起きてすぐだけど、朝食は食べられるかな？」

「食べますー。」

「よかつた。もうできるから、座つて待つてね」

「なにか手伝えることがありますか？」

「じゃあ、テーブル拭いてもらいたい？」

「はーい」と返事をして布巾を洗つ私を、ものすごい麗しい田で見つめてくる。

綺麗な人に見られるのって緊張するよね。
頼むからあんま見ないで欲しい。

お返しとばかりにこいつらも「チソリ盗み見しようと田線をズラして、フライパンから出来立てのスクランブルエッグをお皿に盛り付けているルイさんを見やる。

慣れた手つき。まだよい半熟のそれは喉から手が出そになるほどおいしそうだった。

当初の予定をすっかり忘れ、ルイさんとこよりスクランブルエッグに釘付けになっていた私は、瞬間飛び込んできたキレイな手が髪をさらりと耳にかける姿を見て、なぜか赤面してしまった。

ひとりで顔を赤くしている私に気が付いたのか、ルイさんは田線を合わせて微笑みながらこいつらに一歩近付くと、腰をかがませて顔の高さを私のそれと同じにする。

私の身長は168センチで、女の子の中ではかなり高い方だ。その私にこれだけ腰を曲げてやつと顔の位置が同じになるつて、一体何センチあるんだね？

不思議に思つてみると、じょじょんじょん顔が近づいてくる。

え？え、ええええええ！？

「おひと、危ない」

笑みは崩さないままルイさんは呟くと、先ほど詰めた距離をすつと引いた。そして顔を両手で覆つてから、前髪をかきあげてこぢらに向く。

私はといえば、あんなに至近距離で見たのその肌に、毛穴がひとつも見当たらなかつた事実に驚いていた。色気なくてスミマセン。さつき赤くなつたのはなんだつたんでしょうね。氣のせいですかね。

「そんなにかわいい田で見つめないでよ、花音けやん

やれやれといった風にかぶりを振りながら、これまでキレイな眉根を寄せる。やけに様になるなパート2。外国育ちの賜物だろうか。

「うわあかわんみたいな花音ちゃんが、真つ赤な顔をして僕を見つめるもんだから…あまりにかわいくて唇舐め回したくなつやつたよ。危ない、危ない」

「ああ止まれてよかつた、花音ちゃんの嫌がることしたら出でいかなきやだもんね」と言いながら、スクランブルエッグを盛つたお皿を持って私の横を通り過ぎる。

。…………。

えーと。

「ひやせわん、ヒサヒのふたつ結びのことかしら。」の位置でしばつてるのにつきはしないんじや…まあそれはいい。

今、くちびるまめまわしたい、って言つたよね?
え、言つたよね? 聞き間違いじゃないよね!?

なに!? 私もしかして唇舐め回されるとこひだつたの!?
イヤだ!! キモチワルイ!!!!!! いくら見た目が良くても好きな人以外からされるなんて拷問もいいとこ……やっぱり変態だ!!
おいしいご飯を作る見た目のいい変態!!

やっぱ追い出した方がいい!? いいよね!?

あでもラズベリーとくるみのパンが私を呼んでる…あれ食べてからでいいかなあ!?

「花音ひやーん、テープル拭いてもらつていい?」

「…………ツ……」

てゆーかそんなこと思つたとしても黙つてくれりやいいのに!
いや出来れば極力思わないで欲しいけど、この際、ね!! 百歩譲つて……ああでもなんで私が譲歩しなきゃいけないの!? なんであんなに変態なおおおおお!

「花音ひやーん?」

甘つたるい声で呼び続ける変態にだんだん殺意が湧いてきた。

女とみればああいう態度なのだろうか。昨日は天然かと思つたけど

違つよつだ。一辺後ろから思い切り殴られたらいい。鈍器で。

だけど部屋のいろんなところから香るおいしそうな匂いに、私の腹の虫は勝てない。

変態は嫌だけど、ラズベリーとくるみのパンを食べたいといつ気持ちの方がどう考へても大きい。

変態はいつでも追い出せる。だけどあのパンはその変態がいないことには食べられない。食べられないのだ！あと欲を言えば他のレパートリーもぜひ食べたい！

「今行きます……」

小さく返事をしたのと同時に、食いしん坊で貪欲な私のお腹が、ぐうっと音をたてた。

キッキンから出て、リビングに移動する。スクランブルエッグのお皿を持ったまま立っている変態がにっこり笑いかけてきたが、なるべく視界に入れないようにしてテーブルを綺麗に拭いた。

お皿をテーブルに置きながら、「つれないなあ」って呟くが聞こえたけど気にしない。

「ワイ。変態、こわい。

「じゃあ他の料理も持つてくれるね」

「…運ぶの手伝います」

「大丈夫だよ。花音ちゃんはゆっくりしてて

あまりしつこく言つてもかえつて迷惑だらう、と都合のいい解釈をした私は、「じゃあ顔洗つてきます。片付けはやりますね」と声をかけて洗面所に向かう。

ポンプ式で、泡になつてでてくるお氣に入りの洗顔料で顔を撫でるよう洗う。

もともと肌は荒れにくいし丈夫な方だ。だけどあの変態の縄のよつな肌を間近で見た私は、こここのところ停滞気味だった美意識とやらを引っ張り出してきて、念入りにケアする。

もちろん毎日のスキンケアに手は抜いていない。要は気の持ちようなの！今日からサボつてた美顔器もやる！

決意を新たにリビングに戻れば昨日の夜と同じく、テーブルにはたくさんの料理が並んでいた。

「おかえり。準備できたよ。食べようか?」

すでに席についていた変態がこちらに声をかけた。

これ当たり前だけど、朝からこの人一人で作ったんだよねー??

「おおお、おいしそー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

感動のあまり若干拳動不審な私を見ても、やっぱり嬉しそうに笑っている。まあある意味懐の深い人なんだろう。うん。そういうことにしてもいい。

「たくさん食べてね」

「はーーーーーただきますーー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

ぴょこん、と飛ぶように着席してすぐにお箸を手に取る。
どちらから食べようか、どうしようつ、腹がはちきれてもいいーー全部
食べる!

ラズベリーとくるみのパン、スクランブルエッグ、コーンスープ、
鮭のムニエル（ローズマリーが添えてあつた。凝つてるー）、ウイ
ンナーにチキンナゲット、シャキシャキレタスのサラダ。

ホテルの朝食バイキング顔負けだ。こんな贅沢なおうち朝ご飯生ま
れて初めて!
きれいに切り分けられたパンを一口頬張れば、涙が出そうなほどお
いしかった。

「～おいしい……！」

「よかつた。花音ちゃん、朝食は食べないって聞いてたんだけど、つい作りすきやつて」

その細く綺麗な手でパンをつまみながら話す。食べ方も綺麗だ」と。様になつてゐるパート③。映画にてきやうだわ。

「お母さん情報ですね…。確かに普段はあんまり食べませんけど、たまにパンをかじつてから仕事に行くことはありますよ。お母さん の送つてくれるベーグルとか」

「ああ。玲子さんのベーグルは絶品だよね。」

「食べたことあるんですか？」

「うそ、もう何年も前ですね。」

て、「とはだ。」の人がまだ実家にいる間に来た」とがあるんだらうか。

そのまま「ーンスープを飲めば、これまたおいしくなります」と声をあげてしまった。

「んんんんーー！」

「花音ちゃん、どうしたの？」

「おこしこんなおこしこーンスープ初めてつー！クール
じゃないですよねー？」

カップをダンシとテーブルに置いて主張すれば、変態は声をあげて笑った。

「はははっーうん、それも僕の手作り、です。気に入つてもらえてうれしいよ」

まあなんとなんと！コーンスープって作れるの！？いやクールだつて私からしたら贅沢品なんだよ！？コーンスープ界ではお高い方だし、もちろん味もおいしい。大好き。だけどこの手作りコーンスープはそれをさらに上回る！なめらか！なめらかです！！！それからどんどんいろいろんな料理に手を付けていくうちに、とっくに胃袋臨界点は突破したけど残念なことに手が止まらなかつた。どの料理も、おいしそうぎる。

「幸せ～。あ～太る～。でもおいしいっ～！」

「花音ちゃんは痩せすぎだから、少しくらい太つても大丈夫だよ。今ままじゃ僕が抱きしめたら折れちゃいそう」

「させません」

「じゃあ僕の料理をいっぱい食べて、僕が力いっぱい抱きしめても折れない体になつたら、抱かせてくれる？」

舌なめずりすなーーーーーーーーーー綺麗な顔が台無しだわーーー抱くの意味絶対違つだろーーー

「嫌です。無理です。あり得ません」

思いついたままに否定の言葉を並べれば、変態は少し悲しそうな顔をした。まあちらも人間だ。これだけ否定されたら悲しいわな。といふか誘いを断られたことなんてあるんだろうか？

「あ、そうだ」

「はい？」

またなにを閃いたんだ変態。せつかくのおいしい料理が台無しになるから黙ってくれないかな。もうちょっと落ち込んでたらいいのに。

「僕、布団が欲しいんだけど買つてもいいかな？」

「え？ あ。『めんなさい、ソファーの寝心地悪かったですか？』

うちの間取りは1LDK。玄関を入ってすぐ右手にトイレとお風呂場があつて、短い廊下を抜けると10帖ほどのリビングダイニングに繋がる。そしてリビングの右側に3・5帖の寝室。都心でこの広さ、しかも、長風呂大好きな私はどうしても追い炊き機能のついている部屋に住みたくて、そうなると新しめ物件じゃないと要望は叶わない。

部屋は狭くてもいいからとにかく追い炊きの付いている物件を夜な夜な探していた私を見かねて、母が飲み屋で友達になつたらしい不動産業を営んでいるという人を紹介してくれた。

そして「お母さんには、お世話になつたから」と、変態と同じようなセリフを放つたその人は、この部屋をとんでもない破格で私に貸し出してくれたというわけ。

母のおせっかいにはこんな風に度々恩恵を受けている。迷惑被るこ

ともないけど。今みたいに。

私は寝室にベッドを入れて寝ていて、もちろん部屋が狭いからベッドとタンス置いたら足の踏み場もないけど、生活スペースと寝る場所を分けられるのはすつごく助かる。突然友達が来てもリビングのもの寝室に放り投げたりできるし。ズボラですみません。掃除は一応するけど、いつ誰が来ても平気なほど片付けてはいません。ホントすみません。

だから昨日夜、変態にはリビングで寝て頂いたんだけど。（しっかり寝室の鍵かけてね。自意識過剰って呼んでもいいよ）

リビングにはソファーべットつていう、背もたれを倒すとベットになるすぐれものがあって、友達が来た時はいつもそこで寝てもらつてる。遠い昔の彼氏とやらに買ってもらつたから値段は覚えてないけど、すつごい寝心地が良くてはこの家に泊まつた人には評判のいいものだつた。はずなんだけど。

変態の身体には合わなかつたかな。睡眠は生活するうえで大事なこと。一週間とはいえ快適に過ごしてもらいたい。

「寝心地はすゞよかつたよ。だけど僕、布団に憧れがあつて

「ああ、なんだ…」

いや、氣をつかつてそう言つてるのかもしれない。だけど割と心配したからちょっと拍子抜け。布団に憧れつて。外国暮らしてたんだから分からなくもないけど。新しい家でやつたらいいじゃないの。

「もう少しう出て行く時には一緒に持つていいくよ。せっかく日本に帰ってきたんだし、早く布団の感触を味わいたくて」

「まあ、別にいいですけど。持つて行つてくれるなら」

「本当ー？ ありがとつ花音ちゃん！」

手の平を顔の前で組んで大喜びする変態はとても幸せそうだ。

しかしみアクションがでかい。その間も私はナゲットやサラダをもぐもぐ食べ続ける。ドレッシングも手作りっぽいな。なんでこんなにおいしいんだろう。こいつお店でも開いたらいいのに。

「わっそく今日買に行きたいんだけど、花音ちゃん今日の予定は？」

「寝ます。一日。泥のよう」

「つまり予定は何もない、っていうことだよね？」

嫌な予感がする。すごい嫌な予感がする！！！頷いたらダメだ！私の予想が正しければ、ものすごい面倒なことになる！もう食後のコーヒーにたどり着いたらしい変態は優雅にカップを持って微笑んでいる。少食だなあ。

「あります。私は今日寝るんですけど」

「誰かと約束があるわけじゃないよね？」

「寝るところ自分自身との約束です」

「今日布団を買いに行きたいんだ。案内してくれない？」

「イヤです」

「お願い。この辺の」と、まだよく分からぬ

「他の人に頼んでください」

「花音ちゃんに行きたいんだ」

嫌だ！！無理無理！！こんな田立つのと一緒に歩いたら世間様の田
線を一心に集めちゃうじゃない！！ただでさえ休日ひとりで歩くと
いろいろあるのに！
田立ちたくない！絶対に田立ちたくない！！

「とにかく私は今日は寝るんですー寝るつたら寝るんですーーーいつてらっしゃいーーー」

「僕と一緒に出掛けるのは何か不都合でもある?」

「いや、その…」

「なに?」

「別にしそうやわけじや…」

「言つて。花音ちゃん

「……。」「

「花音ちゃん?」

「なんか、目立つやうで…」

「これはだいぶ失礼だ。自分でもわかってる。だけど説あつてもうとにかく静かに暮らしたい私は、自ら目立つようなことは極力したくない。ただの言い訳になっちゃつかもしれないけど。

だけどそんな私の失礼な発言もなんとも思わないのか、変態は首を傾げるとそのまま頬杖をついてカップをテーブルに戻す。

「花音ちゃんんだって立つでしょ？こんな雑誌のモデルやってたくらいなんだから」

「なああんでも知ってるのよーー？」

「あー。いいな、その口調。素の花音ちゃんが見れて嬉しい」

おつと、思わずタメ口で話しかかった。我を忘れるその他のいろいろも忘れちゃうんだよね。ダメだな…タメ口で話すと口が応でも親しくなっちゃうから気をつけたのに。

「花音ちゃんの載つてた雑誌、持ってるんだよ。あ。もう少いとかわしいことには使ってないよ？」

「いかがわしい雑誌に載つた覚えはなあああい！……？」

「確かに女の子向けの雑誌だったけど、水着の写真もあったでしょ？」

「ファッショーン・ファッショングだから…グラビアとは違う！一緒にしたらグラビアの方たちから怒られるから…！」

「え、そうなの？」

「いや知らないけど…グラビアモデルさんの方がよっぽど大変だと私は思つてこるー！」

「花音ちゃんの水着姿つてだけで僕もつドキドキしちゃつて大変だったのに。体のアチコチに支障をきたしたよ。あんなとこやこんなところが」

「変な言い方するなあ！－あなたのそんな情報いらぬのよ－－て
ゆーか燃やせ！－今すぐその雑誌を燃やしてくれ－－」

「イヤだよー僕の宝物だもん」

だもん、じゃねえええ－－－－－

完全にブチ切れた私は、お皿に残っていた鮭のムニエルを口に放り込むと「じちそうをました」と挨拶をしてから一人分の開いたお皿やお箸をお盆にうつす。そしてそれを持って立ち上ると、そのままキッキンへ移動して全力で洗う。

これを洗つたら寝室に閉じこもる。鍵かけて。
あんな変態と一緒に出掛けるのは絶対に御免だ－－！

クスクス笑いながらコーヒーを飲み干した変態は、残った料理にラップをかけて冷蔵庫にしまいだした。楽しそうなのがムカつく。
無言を決め込んだ私はそのままものすごいスピードでお皿や変態が下げてくれたカップを洗つと、予定通り寝室にダッシュで逃げ、逃げこみ…。

逃げ込みたかったのにいいい－－－－－

「ダメ。捕まえたよ、花音ちゃん」

うわわわーん－－－－－

背後からすっぽりホールドされた私は心中で大号泣。

しかも約束通り、私に触れないように腕も背中を浮かせているのが余計に泣きを誘う。

長い手を輪つかのようにして上からすっぽりと捕まえられた。長身と

その長い腕のなせる技だ。非常に腹立たしい。

Please Kanon... go with me...

今のはわかつたぞ！なんか頼まれた！多分一緒に行こうって言われたつ！

こんな状況だけど私はきっと口を閉じておらず、英語がちょっとわかる気分になつてきただぞ。初めて意味を聞き返さずに答えられることに無性に喜びを感じる。それが例え今時の小学生ならわかるであらう言葉でも。その喜びをかみしめたい私は、言葉の意味を理解したことをひけらして（自分に）再度断りを入れた。

「一緒に行きません」

If you don't come with me
become a lost stray child

「ダメです！」

w A
a r
y? e

y o u
O K

e v e n
i f
I l
o o s e
m y

「ダメダメダメー！絶対ダメー！！！！！！！」

もちろん何言ってるかなんでもうさっぱりわからない。わからないけど持てる力全てを使って否定する。すぐ後、パッと拘束の手が解かれる。ああよかったです。やっと諦めてくれた。そう思って後ろを振り向くと、変態は満足げな顔をして立っていた。なんでそんなに嬉しそうなの？本当はひとりで行ったかったとか？もしくはドM？

「よかつた。じゃあ、支度してきてね。僕も着替えてくるよ」

「はあああ！？」

？
スタスターと自分のキャリーケースのところまで歩いて行くと、今日
着ていくりしい服を引っ張り出して頷いてくる。いやいや！おかし
い！？何がどうしたらこうなるわけえええ！？！

「ちょっと…！ダメだつて言つてんでしょ！？人の話聞きなさいよ

「だつて花音ちゃん、ダメつて言つたよね？」

「...はい?」

「あつたよね？」

しゃがんだまま凄みのある笑顔を向けられてちょっと身体が固まる。なんだこれ。いつも違う意味で怖いぞ。冷や汗もんの私は余計なことは言わずに事実を完結に述べた。

「…お詫び申した」

「ね？」「僕が迷子になつてもいいの？」つて聞いたら、ダメつて言ったもんね？じゃあ花音ちゃんが一緒に来てくれないと、僕迷子になっちゃうから。」「

「なああああああ！－な－－な－－な－！なあああ！？」

「取り消しはできないよ、花音ちゃん」

「ずるいでしょそれ！――ありえないから――――――私英語わかんな
いの知ってるでしょ――つ――？」

「一緒に行かないって言うからには、その前の会話が理解できたんだしょ？僕と話してゐるうちに英語が理解できるようになったんだと思つてた。違うの？」

「でも、一度言つた」とは取り消さないよな。花音ちゃんは

..... ! ! !

「」の変態、まさか……！…………！…………！…………！

前へ向かうのだとた。

るほど置いてある。

きっと母がいつものように無理やり見せたんだろう。そしてまた帰りにお土産とか称して持たせたんだろう。いつものことだ。もらつた方は迷惑だろうに。なんでよりにもよつて水着のカット。他にもいっぱいあつただろうに…！

つい悪い癖が出そうになつた私は必死それを胸の中に押し込める。

この人は、お母さんの友達の息子なんだから。
お母さんの予定も知つてたし、ベーグルだつて食べたいことあるつて

言つてた。ましてやあの口調をマネする」が、会つてなさればでもない。

「それに、クリスマスの買い物もしたいんだ。イブの夜はフォンダ
ンショコラを焼こうと思つんだけど」

「フォンダンショコラつ！？」

だからゲームでも出そうになる程に私の目は光った（多分）。食べたい、絶対食べたい！！今年は仲間うちにはみんな彼氏がいるので、お母さんの予想通りイブはワインでもがぶ飲みしようと思つてたところだつたんだ！

ひとりで過ごすよりは寂しくないし（相手は変態だけと） 何より
フォンダンショコラが食べられるならこんなに嬉しいことはない！

見るからにテンションの上がった私を見て、服を選び終えたらしい変態は立ち上がった。

「よかつた、イブの夜は一緒に過ごせそうだね。特別な日だから、少し高くてもいつもとは違うチョコレートを使って作りたいなあと思ってるんだけど、どこかいにお店知ってる？」

「知ってる知ってる！！青山にあるショコラ専門店！そのチョコレートすっごいおいしいんだけど、実際お店でも使ってる製菓用のチョコも最近販売してて、それでお菓子作りするとこれがまたおいしいんだって！私はお菓子作りなんてしないから食べたことないんだけどね」

何を隠そうわたくし桜木花音24歳、三度の飯よりチョコレートが大好きなんでござります!!

基本的に食べ物はなんでも好きだし甘いものも好きだけど、チョコは格別！一キビが怖くては大量には食べてないけど、何か自分にご褒美つて時には必ずチョコレートを食べることにしてる。できることなら毎日毎食後、寝る前、朝起きた時、一日5回板チョコを食したい。それくらい好き。

「ああ、いいね。クリスマスイブにぴったりだ。案内してくれる？」

「うんッ……あ。」

「それなら布団も一緒に買いに行ってくれるよね？最初からこの方法で攻めればよかつたな…」

指先を顎にあてて変態が考え込む。いや、多分最初からそれだけ言われたら地図書いて渡して終わりだつたと思うよ。

いろいろ混乱してたからフォンダンショコラという単語だけで余計にテンションぶち上がったんだと思つよ。ある意味作戦勝ちだよ。

「じゃあ着替えてくるね」と言つて変態は洗面所へと向かう為にリビングから出て行つた。

それを見送つた私は長く息を吐くと、自分で寝室へと足を向ける。よし、こうなつたらガツツリ化粧してあの無駄に綺麗なお顔とバラソスとれるようにしなくちゃ。

まあガツツリ化粧したとこであの綺麗さには適わないけど。でも何にもしないよりマシだよね。

少しだけ胸に灯つた危険信号と、昔の話を自分からするくせに、こちらが口を開こうとすると食べ物のことでこまかす変態には気がつかないふりをして、私は寝室に戻つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5279z/>

トラブルDAYS！

2012年1月8日21時48分発行